

39 高坂駒三郎と旧蔵書簡

—森鷗外書簡など

小 田 皓 二

高坂駒三郎は、日本医師会編集の『医界風土記—中国・四国篇』（二九九四）香川県の部に「高坂夜雨のこと」と題して紹介されている。一八六六年（慶応二）に現在の高松市に生まれ、一六歳で上京してドイツ語学校に入り、次いで岡山県医学校に入学した。在学中に学生リーダーとして活躍し、岡山医学会の発足と『岡山医学会雑誌』の発行に当たって抜群の貢献をしている。

九〇年（明治二三）に第三高等中学校医学部を卒業し、翌年に再び上京してドイツ医書の翻訳に従事していた。九八年（明治三一）に高松へ帰って小児科を開業し、「夜雨」と号して漢詩では香川県随一と評価され、一九五三年（昭和二八）八八歳の生涯を終えた。

高坂の旧蔵書簡には、森鷗外、富士川游、荒木寅三郎

（京都大生化学教授、総長、学習院長）、鈴木文太郎（京都大解剖学教授）、荒木蒼太郎（岡山医大精神科教授）、荒木直躬（蒼太郎の息子、千葉大学長）、第一生命保険相互会社を創設した異色の医師矢野恒太など有名医師の書簡があり、高坂の学識と幅広い交友を知ることができる。

鷗外、富士川の書簡は『鷗外全集』『富士川游著作集』に見られない。最も古いのは一八九一年（明治二四）四月一七日の鷗外の手紙である。高坂は学生時代からドイツ医書を翻訳し、卒業後に上京してヒルト著『新纂衛生学』の序文を鷗外に依頼した。鷗外は広瀬旭窓の文を引用した七言絶句を序文とし、字は上手な人を書いてもらってくれ、気にいらなかったら捨ててもよいと述べて原稿の誤りを指摘している。

「題新纂衛生学首広旭莊句良工医国固虚言到能医人豈容易故及 無人無国不須論人健国强真理存至境医人即医国良工医国豈虚言」

この年鷗外は二九歳で、ドイツ留学から帰国して三年目の新進気鋭の陸軍二等軍医正、軍医学校教官であった。ドイツ留学記念三部作の『舞姫』『うたかたの記』『文づ

かひ』を発表し、文壇の寵児として序文を依頼されるほど有名になっていたことがわかる。家庭的には長男が生まれて、間もなく妻を離婚していた時期に当たっており「この頃不快にして文思しぶり」と書いている。しかし鷗外の序文は、印刷に間に合わなかったためか『新纂衛生学』には掲載されていない。高坂はその他にも生化学、薬物学、小児科、産科婦人科、眼科などの翻訳書出版している。

富士川游は一九一四年(大正三)四月に欧米先進国になり、医師の弔慰、所得補償、生活支援など、現在の都道府県医師会の福祉部のような組織づくりを研究するため、日本医師協会の設立を提唱していた。この運動を推進するため高松の医師に協力を願いたいという手紙である。

荒木寅三郎の手紙は、一九〇九年(明治四二)に京大医学部の学生が香川への修学旅行で世話になり、京大医学部芝蘭会長として礼状を出しており、その他にも、自分が高松へ行った時の礼状や贈り物の礼状もある。荒木が岡山の生理学教授をしていたのは高坂の卒業後である

が、漢詩を通じて親しかったことがわかる。鈴木文太郎の手紙も高松で世話になった礼状である。

学生時代からの友人であった荒木蒼太郎の手紙は、ドイツ留学への旅立ちなど近況報告と漢詩を送ったものである。息子の直躬は父が亡くなった一九三二年(昭和七)に、晩年の父は周易の研究に没頭しており、亡父の志を継いで東大で精神病学を専攻していることを報告している。

同じく学生時代から親しかった矢野恒太の手紙は、書を好んでいた高坂の依頼に対する返事などで、書を趣味としていただけに見事な筆跡である。矢野の没後に第一生命社長であった息子一郎は、生涯にわたる長い親交を謝し、高坂が八五歳の高齢で生命保険が満期になった祝辞と、父の記念の品を送り、父の伝記を編纂するので岡山時代の資料や思い出を教えて欲しいという依頼の手紙を出している。香川の医師・高坂駒三郎旧蔵の、鷗外など有名医家の書簡を紹介する。

(小田病院)